古代における死を悼む和歌の展開
―挽歌と哀傷歌の比較検討を通して―

小倉　久美子

はじめに

挽歌は、相聞・雑歌とならぶ『万葉集』の三大部立のひとつである。総歌数は二一九首あり、特に巻二・三に集中している。『万葉集』の挽歌については、個々の歌の解釈など、膨大な先行研究がみられ、なかでも挽歌が詠まれる場を考察した検討が盛んである。『万葉集』と同時期の歴史書である『日本書紀』『続日本紀』には挽歌が詠歌されたという記述がみられない。そのため、挽歌の場が論じられるとき、問題となるのが大御葬歌である。大御葬歌とは、『古事記』にみられる倭建命が崩御したときに詠まれたつぎの四首の歌謡のことである。

『古事記』中つ巻

……即ち崩りましき。ここに駅使を貢上りき。ここに倭に坐す后等また御子等、諸下り到りて、御陵を作り、すなはち其地のなづき田に匍匐ひ廻りて、哭きまして歌ひたまひしく、

なづきの田の　稲幹に　稲幹に　匍ひ廻ろふ　野老蔓

とうたひたまひき。ここに八尋白智鳥に化りて、天に翔りて浜に向きて飛び行でましき。ここにその后また御子等、その小竹の苅杙に、足きりて破れども、その痛きを忘れて哭きて追ひたまひき。この時に歌ひたまひしく、

浅小竹原　腰なづむ　空は行かず　足よ行くな

とうたひたまひき。またその海塩に入りて、なづみ行きましし時に、歌ひたまひしく、

海処行けば　腰なづむ　大河原の　植ゑ草　海処はいさよふ

とうたひたまひき。また飛びてその磯に居たまひし時に、歌ひたまひしく、

浜つ千鳥　浜よは行かず　磯伝ふ

とうたひたまひき。この四歌は、皆その御葬に歌ひき。故、今に至るまでその歌は、天皇の大御葬に歌ふなり。……。

倭健命が崩御すると、后や子供たちが御陵を作り、匍匐して泣きながら歌を詠んだ。すると大きな白鳥があらわれて飛んで行ったので、それを追いかけながら歌を詠む。こうして詠まれた四首の歌は、現在まで天皇の御葬においてうたうということである。

従来、大御葬歌は挽歌の原始的な姿として考えられてきた。すな

わち、殯宮内では『古事記』の大御葬歌に淵源を求めうる伝統的な「女の挽歌」が詠まれ、それに対して殯庭において行なわれる誄に刺激を受けて形成された挽歌を「殯宮挽歌」と定義付けられる、という意見である。[1] 殯宮とは、皇族が亡くなったさいに、殯儀礼を行なうために、新たに建てられた施設のことである。その内外では、死者の霊を慰撫するために、発哀や誄などの儀礼が行なわれた。[2] その後、大御葬歌を歌垣の歌の転用であるとする主張や、[3]「女の挽歌」論に懐疑的な意見があるものの、[4] 大御葬歌と関わらせて説く殯宮挽歌論は、ほぼ定着した手法となっている。

先行研究の多くは、大御葬歌の一首目「匍ひ廻ろふ」（傍線部）の表現を殯宮における匍匐儀礼と結び付けて解釈し、これを殯宮において詠まれた鎮魂・招魂の歌として理解する。ただし、それに否定的な説もある。「匍ひ廻ろふ」（傍線部）という表現は匍匐儀礼に特有の語ではなく様々な場面で用いられていること、『古事記』では「葬」と「喪」とが明確に使い分けられており、御葬は葬送・埋葬を意味することから、大御葬歌が詠まれた場を殯宮と捉えることはできないとする見解である。[5]

これまで『万葉集』の挽歌が詠まれる場ついては、殯宮を主要な場として検討されてきた。[6] それは、大御葬歌が殯宮において詠歌されたものであるとする主張と、『日本書紀』にみえる殯宮の記述とに裏打ちされたものである。なかでも、天武天皇崩御に対して行なわれた殯宮儀礼は最も詳細に記されており、先行研究において検討の対象となることが多い。『日本書紀』によれば、天武天皇の殯宮は朱鳥元年（六八六）九月一一日に作られ、埋葬される持統二年（六八八）一一月一一日までの約二年間にわたって営まれた。その期間、殯宮の庭中では臣下による発哭（発哀・慟哭とも記す）が九回、誄が一二回たてまつられている。こうした殯宮儀礼と挽歌の詠歌とは不可分のものであり、誄に影響を受けた挽歌の表現がみられると指摘する研究もある。[7]

しかし、大御葬歌が殯宮ではなく葬送・埋葬の場で詠まれた和歌であるという研究成果が提示された今、『万葉集』の挽歌についても殯宮だけではなく、喪葬儀礼の様々な局面で詠まれたものであると理解しなければならないだろう。そもそも挽歌とは、中国において葬送のときにうたわれた歌に由来する言葉である。その挽歌が、日本においては葬送や殯宮に限らず、喪葬の様々な局面で詠まれたものであると捉え直さなければならないという現状は、『万葉集』の挽歌をめぐる研究が、挽歌とは何なのかという問題に再び直面しているといえるのではないだろうか。本稿でもその点に留意したいと考えている。

平安時代の勅撰和歌集において、死を悼む和歌は哀傷歌という部立に所収されている。一般的に相聞・挽歌・雑歌は『万葉集』の三大部立とされるが、全二十巻をなす『万葉集』は段階的に編纂が進

められ、巻によっては部立がなされていないものもあり、その性格は様々である。このように『万葉集』の編纂過程が複雑であるのに対し、勅撰和歌集の編纂は計画的に進められた。そのため所収歌を検討することは、勅撰和歌集における編纂者の意図を探ることにつながる。とくに哀傷歌は、編纂者が死というものをどのように捉えているのかを探る手がかりとして追究されてきた課題といえる。

松田武夫氏は、『古今和歌集』哀傷歌は自己の死に関する歌（辞世歌）と他人の死に関する歌との二つに大別でき、後者は葬送時の歌・服喪中の歌・追悼の歌といったように時間的推移によって配列されていることを指摘している。[8] 時間的推移によって配列する手法は、四季や恋歌といった他の部立にもみられるものであり、『古今和歌集』の特徴のひとつといえる。

田中直氏は、『古今和歌集』と『拾遺和歌集』との哀傷歌の配列を比較検討する。その結果、『拾遺和歌集』哀傷歌では季節の推移によって和歌を配列しており、『古今和歌集』とは異なる配列意識がみられるということを明らかにしている。[9] これは『拾遺和歌集』が自然の移ろいに重点を置いて編纂されたためと考えられている。

さらに、菊地靖彦氏は『古今和歌集』哀傷歌は他の部立と比較すると、編纂者が詠んだ和歌の割合がもっとも大きいことから、哀傷歌のあるべき表現はこういうものであるという性格が編纂者によって決定づけられた、と指摘する。[10]

以上のように、死を悼む和歌について従来の和歌研究は『万葉集』や『古今和歌集』といった個々の和歌集のなかで考察するに留まっている。これは和歌集それぞれの編纂過程や性格が異なるため、一様に比較することがためらわれるのであろう。しかし、死を悼む和歌を通時代的にみることで、死をめぐる古代人の文化的営為を知ることができるのではないだろうか。

そこで本稿では、奈良時代に編纂された『万葉集』と、平安時代に編纂された「三代集」とを比較検討していきたい。『万葉集』は挽歌の部立に所収されている歌々を、「三代集」は哀傷歌の部立に所収されている歌々をそれぞれ検討対象とする。ただし、先ほども述べたように集の編纂過程や性格が異なり、和歌の表現形式も違うため、まずは分析方法の検討からはじめたい。

一　分析方法の検討

死を悼む和歌は、奈良時代のものは『万葉集』の挽歌の部立に、平安時代のものは勅撰和歌集の哀傷歌の部立に大半が所収されている。ただし、詠み人があらかじめ挽歌や哀傷歌という部立を意識して詠歌するということは到底考えられない。部立はあくまでも編纂者の意図するところであり、その意図は各和歌集それぞれで異なる。そのため、同じ和歌であっても和歌集によっては異なる部立に所収

される場合がある。

なぜ、挽歌・哀傷歌の部立に所収される和歌を、一方では死を悼む和歌として扱わないことが編纂者の意図によって可能なのかという疑問は、そもそも死を悼む和歌とは一体何なのかという問題に通じるように思う。そこで、『万葉集』挽歌と「三代集」哀傷歌との比較分析に入る前に、まずは挽歌・哀傷歌の部立に所収されない和歌の検討から試みたい。なお、飛鳥・奈良時代の場合には『万葉集』以外の和歌集が現存していないため、今回は哀傷歌の部立のみを考察の対象とする。

平安時代における和歌集をみたとき、勅撰和歌集のような公的な和歌集では必ず部立があるが、私的な和歌集においては部立がないことがほとんどである。たとえ部立があったとしても、必ずしも哀傷歌の部立が立てられるわけではない。和歌集の編纂過程や編纂者の意図によって、部立の有無や方法が異なるのである。

例えば、紀貫之の私家集である『貫之集』は、巻の第一から第四までが屏風歌、第五が恋、第六が賀、第七が別、第八が哀傷、第九が雑というように、巻によって歌の分類がなされている。そのうちの雑の巻には、つぎのような和歌が収められている。

『貫之集』第九・雑（八七八）

世の中心細く、つねのここちもせざりければ、源公忠朝臣のもとにこの歌をやりける。このあひだ病重くなりにけり

手にむすぶ　水にやどれる　月影の　あるかなきかの　世にこそありけれ

後に人のいふを聞けば、この歌は返しせんと思へど、いそぎもせぬほどに亡せにければ、おどろきあはれがりて、かの歌に返しよみて、愛宕にて誦経して、川原にてなん焼かせける

和歌の意味としては、手にすくった水に映っている月のように、存在しているのか存在していないのか曖昧な世の中である、といったものである。詞書によれば、この和歌は貫之が世の中を不安に思い、通常とは異なった様子であったときに、源公忠のところへ贈ったものであるが、そうこうしている間に貫之の病状が悪化したようである。その後のことは左注に詳しい。それによれば、貫之の死後に人がいうには、この和歌を贈られた公忠がそのうち返歌をしようと思っているうちに貫之が亡くなってしまった。貫之の死を公忠は驚き悲しんで返歌を詠み、愛宕において誦経をしたのち和歌を河原で焼いた、ということである。

『貫之集』は、自撰的要素と他撰的要素とが入り混じった歌集であるため、自撰なのか他撰なのかを峻別することは困難である。木村正中氏が「『貫之集』八七八には、前記のごとき左注がついていて、これは当然他撰を示す。しかしながら、それが実証的に有効な

のは、あくまでこの部分に関してのみである」と指摘するように、[11]左注に貫之の死後の事情が記されていることから、左注に限ってみれば他人の手によるものであることは確実であろう。ただし、当該個所全体をみたとき、左注との関係は不明瞭である。詞書によれば貫之は病に冒されているため、その軽重は不明であるものの、結果として死に至るほどの病であることを考えると、そのようななかで私家集を編むとは考え難いだろう。当該個所が自撰であれ他撰であれ、本史料からいえることは、詞書の主語が貫之であるのに対し、左注の主語が公忠であることから、詞書と左注とは性質が大きく異なるということ。そして、編纂者は無常感を詠んだ和歌として当該歌を捉えて、『貫之集』の雑の巻に収めたと考えられるということである。

当該歌は、実は『拾遺和歌集』の哀傷歌の部立にも所収されている。『拾遺和歌集』は『貫之集』と同様の詞書と和歌とを記したのち、左注に「この歌詠み侍て、ほどなく亡くなりにける、となん、家の集に書きて侍」（一三二）と記す。このことから、『拾遺和歌集』編纂者が『貫之集』の左注を踏まえて当該歌を哀傷歌の部立に所収した、という経過が推察できる。

このように、同じ和歌であっても、哀傷歌として所収される場合とそうではない場合とがあることが確認できる。私家集では雑歌として編纂された和歌が、勅撰和歌集では哀傷歌の部立に収められているのとは対照的に、勅撰和歌集の哀傷歌の部立に所収されていない和歌が、私家集では死を悼む和歌として捉えられる場合もある。

『伊勢集』（二八五～二八七）

人のはらからなくなりたる、とぶらふとて

うべもなく 誰もおくれぬ 身なれども 止まるは行くを あはれとや見し

かへし

そむかれぬ 松の千歳の ほどよりは ともゞとだに したはれぞせし

ともゞと したふ涙の 川水は いかなる色か して流れけむ

部立がない『伊勢集』ではあるが、「人のはらから」の死をめぐる和歌であることから、三首は一つの歌群を形成しているとみてよいだろう。ただし、返歌が二首とも「ともゞと」という歌語を重ねて使用している点が不自然に感じる。贈答歌の作法として、相手が使用した歌語を重ねて返歌するということはあっても、自作の和歌において歌語を重ねて使用するという事例はあまりみられないからである。

『後撰和歌集』の哀傷部には、「程もなく 誰もをくれぬ 世なれども とまるはゆくを かなしとぞ見る」（一四一九）という伊勢の和歌がある。字句の異同があるものの、伊勢の和歌と同様であると捉えてよいだろう。ただし、『後撰和歌集』では詞書が「題しらず」

となっている。さらに、『後撰和歌集』には、二首の返歌もみることができる。それがつぎの和歌である。

『後撰和歌集』巻第十九・離別（一三二〇・一三二一）

題しらず　　よみ人も

そむかれぬ　松の千歳の　ほどよりも　とも〳〵とだに　慕はれぞせし

返し

とも〳〵と　慕ふ涙の　そふ水は　いかなる色に　見えてゆくらん

『伊勢集』では弔問歌であった和歌が、『後撰和歌集』では離別の部立のなかに所収されているのである。二首目はやや異なる歌語がみられるものの、歌意に影響を及ぼすほどの大きな差異ではない。

『伊勢集』は『拾遺和歌集』編纂前後に他撰された歌集であることから、『後撰和歌集』のほうが成立は早い。すなわち、『後撰和歌集』では「題しらず」であった和歌が、『伊勢集』では詞書がつけられている。さらに、弔問のやりとりであることを詞書によって説明することで、離別の部立に所収されていた和歌が死を悼む和歌として享受されているのである。

勅撰和歌集において哀傷歌の部立に所収される和歌は、比較的長い詞書を持つ場合が多い。『古今和歌集』と比較したとき、『後撰和歌集』には長大な詞書を持つという特徴がみられるということは和歌研究のなかで広く知られているが、例えば『古今和歌集』にもつぎのような長い詞書がみられる。

『古今和歌集』巻第十六・哀傷歌（八五七）

式部卿の親王、閑院の五の御子に住みわたりけるを、いくばくもあらで女御子の身まかりにける時に、かの御子の住みける帳のかたびらの紐に文を結ひつけたりけるをとりて見れば、昔の手にてこの歌をなむ書きつけたり

かずかずに　我を忘れぬ　ものならば　山の霞を　あはれとは見よ

式部卿の親王とは、宇多天皇の皇子・敦慶親王のことである。彼は閑院の第五皇女を妻としていたが、いくらもしないうちに皇女は亡くなってしまった。そのとき、式部卿親王が皇女の住まいであったところの御帳台の帷子の紐に文が結びつけられているのを見つけ、手にとって見ると、生前と変わらぬ筆跡で「私をお忘れにならないでくださるのなら、くれぐれも山にかかる霞（自分を火葬した煙のこと）をあはれと思って見てください」という和歌が書かれていた、ということである。

このように、詞書はあたかも物語の一場面であるかのように具体的である。『後撰和歌集』離別の部立に所収されていた和歌が、『伊勢集』では詞書による詠歌場面の説明を加えることで死を悼む和歌

として享受されていたことと、勅撰和歌集における哀傷部の和歌のなかに詠歌場面を具体的に語ること詞書がみられるということとを考え合わせるに、和歌集の編纂者が死に関連した和歌としてその歌意を理解させようとするとき、詞書による具体的な詠歌場面の説明を加えなければ、それが死を悼む和歌として成立しない場合があったと考えられる。それだけ詞書による詠歌場面の説明は重要な要素であったのではないだろうか。

すなわち、哀傷歌の部立のなかに和歌を収めるためには、詠歌場面を詞書によって説明することが編纂者には求められたと考えられる。

表Aは、「三代集」における「題しらず」の用例をまとめたものである。本表からわかるように、「三代集」の主要な部立である四季・恋歌の部立と哀傷歌の部立とを比較すると、哀傷歌の部立に所収される和歌は「題しらず」が少なく、大半の和歌に詞書が記されている。これは、哀傷歌が和歌そのものの表現を味わうだけではなく、どのような場面でそれを詠作したのかという場面設定をも含んだ形で死を悼む表現を理解していたためではないだろうか。

表Aにおいて、『後撰和歌集』に一首だけみえる「題しらず」の和歌は、前述した伊勢の詠歌（一四一九）である。この和歌は、勅撰和歌集では「題しらず」であったが、後世の私家集では詞書がつけられている。同様の事例は『古今和歌集』にもみることができる。例えば、『古今和歌集』八五五番歌は「題しらず」「読人しらず」であるが、同じ和歌が『延喜御集』に所収されており、そこでは「おなじ三条の母御息所失せ給へりと聞かせ給ひて、いみじうかなしびさせ給ひて、晩にほととぎすの鳴きければ」という詞書が付けられている。『延喜御集』は醍醐天皇の私家集という意であるが、『古今和歌集』よりものちの時代に他撰されたものであることから、『延喜御集』の詞書は『古今和歌集』の「題しらず」歌を利用して創作されたものであろう。ただし、ここで注目したいのは「題しらず」の和歌であっても、その享受の過程において詞書を付けることで詠歌した場面を明らかにしようとする意図が働いているということである。

菊地靖彦氏が、哀傷歌の部立に所収されている和歌は機知的な表現の巧みさが認められるものの、「特定の死を悼む独自の表現といったものを、ほとんど持ち合わせて」おらず、「一般的、観念的な表現をほかならぬ死につなぎとめているのは、わずかに詞書によってであるにすぎない」と指摘しているように、[12] 所収歌のなかには詞書がなければ死との関連性が保てない傾向が確かにある。

ところで、詞書によって人の死に関連する和歌であることを説明しているにも関わらず、哀傷歌の部立に所収されない和歌がある。それはつぎの和歌である。

『後撰和歌集』巻第三・春下（一〇五・一〇六）

助信が母身まかりてのち、かの家に敦忠朝臣のまかりかよひけるに、桜の花の散りける折にまかりて、木のもとに侍ければ、家の人の言ひ出だしける　　よみ人しらず

今よりは　風にまかせむ　桜花　散るこのもとに　君とまりけり

返し　　あつたゞの朝臣

風にしも　何かまかせん　桜花　匂あかぬに　散るはうかりき

藤原助信は敦忠の子であるから、詞書の「助信が母」は助信にとっては母親であり、敦忠にとっては妻となる女性のことである。「かの家」とは、彼女が生前に暮らしていた家であると同時に、今も助信が住んでいることは和歌の「このもとに」という表現が桜の木のもとにと子供のもとにとの二つの意味を掛けていることからわかる。

不幸にあった人の心を慰めることを弔問といい、服喪中である人とそうではない人との間で交わされる和歌のことを弔問歌という。ここでは「助信が母」の死が詞書によって語られ、敦忠の返歌が妻の死を悼む内容であるものの、服喪の範疇にある者同志による和歌のやり取りは弔問歌とは言い難い。さらに、和歌そのものをみても相手の悲しみを慰めるといった意にはならない。久しぶりの来訪を喜ぶ家の人と、過ぎ去る春と亡き妻の死に想いを寄せる敦忠との間にあるのは死者ではなく、散りゆく桜を軸にして贈答がなされたと解するほうが自然であろう。その点で、当該歌は四季の部立にふさわしい贈答歌といえる。このように、勅撰和歌集の編纂者は歌意をよく理解したうえで、所収する部立を決定していることがうかがい知れる。

これまで哀傷歌の詞書は、菊地氏が「哀傷の歌という、『古今集』の中ではもっとも真率な心情表現と思われやすい歌も、当時においてすら、必ずしも痛切なものとして受け止められなかった」としたうえで、「いかにもまことしやかな詞書にもかかわらず、哀傷歌はやはり観念的で、悲痛の念が素直には受けとられなかったということである。事実に対するあきらかな背反を敢てする虚構は、『古今集』歌の観念性を超克することではなかったか」と述べるように、[13]『古今和歌集』の観念的世界を象徴するものとして評価されてきた。

勅撰和歌集は公的な和歌集という性格ゆえに、誰しもが理解・共感できることを意図して編纂されたと考えられる。すなわち、そこにみえる詞書の詠歌場面は死を悼む和歌の本意をもっともよく反映しているといえるのではあるまいか。死を悼む和歌がどのような場でどのような時に詠まれるのかを知ることは、それが事実かどうかは別にして、社会の通念を探ることにつながると考えられる。

『万葉集』においても挽歌の歌々にはすべて題詞がつけられており、場面設定を伴って歌が所収されている。[14]「三代集」にみえる詠歌場面と比較することは可能である。詞書に着目して、どのような

場面設定がなされているのかを明らかにすることは、死を悼む和歌の本意を探るうえで重要な分析視角となるであろう。

二　詞書にみる詠歌場面の比較分析

死を悼む和歌がいかなる場面で詠まれているのかを探るために、『万葉集』の挽歌と「三代集」の哀傷歌との部立に収められている和歌の詠歌場面を比較したい。詠歌の場面は詞書によって知ることができるため、喪葬儀礼の進行に留意しつつその場面を分類し、それぞれに該当する歌数を分析することによって、死を悼む和歌が詠まれる場面の傾向を探りたいと考えている。本稿で用いる方法は、あくまでも現存史料に基づく限定された和歌集による傾向分析であるが、いくらかの有効性をもつと考えている。島田良二氏が月に対する認識の変遷を考察したさいに用いた研究方法でもあり、[15] 先行する和歌研究において一つの分析方法として用いられていることは心強い。

喪葬儀礼の時間的推移を考慮しながら、詠歌の場面をつぎの①～⑥のように区分した。松田武夫氏は、『古今和歌集』所収の哀傷歌が「送葬時の歌」「服喪中の歌」「追悼の歌」「辞世の歌」といった時間的推移を意識して配列されていることを指摘している。[16] このことも念頭に置きながら場面の分類を行なった。

① 辞世の歌
亡くなる以前に詠んだ和歌を対象とする。

② 詠み人が死を知った時
死後から埋葬地へ運ばれるまでに詠まれた和歌を対象とする。詞書に「薨ぜし時」「死にし時」などと記された和歌がこれに該当する。

③ 喪葬の場面
死後から埋葬されるまでに詠まれた和歌を対象とする。葬送・埋葬の場面を詠歌したものがこれに該当する。飛鳥時代における殯の期間もこれに含むこととする。

④ 服喪の時
喪服の着服から除服までに詠まれた和歌を対象とする。

⑤ 追懐する場面
除服後、故人との思い出が呼び覚まされたときに詠まれた和歌を対象とする。ただし、追懐は自然発生的に生じるため、具体的な場面を特定することは難しい。

⑥ 法要の時
七七日や一周忌などの法会に際して詠まれた和歌を対象とする。

他　場面が不明なもの
具体的な死とは関係なく、自らの無常観を詠むものなどを対

象とする。

以上のように、死を悼む和歌を六つの場面にわけ、該当歌を集計したものが表Bである。

『万葉集』では、②詠み人が死を知った時および③喪葬の場面に、一〇一首（総歌数の約四六％）もの該当歌がみられる。例えば、つぎのような和歌である。

『万葉集』巻第二・挽歌（一五五）

山科の御陵より退り散けし時に、額田王の作れる歌一首

やすみしし わご大君の かしこきや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと 哭のみを 泣きつつ在りてや 百磯城の 大宮人は 去き別れなむ

この和歌は、天智天皇を山科御陵に埋葬し、その儀礼をすべて終えたときに額田王が詠んだものである。このような葬送の場面を詠んだ和歌が多いことから、『万葉集』挽歌の歌々の主眼は死体に直接関わる死・葬送といった生々しい場面を詠むことにあったと考えられる。

一方、「三代集」では、③喪葬の場面での歌は『古今和歌集』の三首のみであり、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』にはみられない。

『古今和歌集』巻第十六・哀傷歌（八三一）

堀河太政大臣、身まかりにける時に、深草の山におさめてける後に、よみける　　僧都勝延

空蝉は 殻を見つゝも なぐさめつ 深草の山 煙だにたて

これは寛平三年（八九一）正月一五日、藤原基経の葬送のあとに勝延が詠んだものである。蝉が死んだ場合は抜け殻を見ることで心が慰められるだろう。しかし人間の場合はそうはいかないので、深草山よ、せめて火葬の煙を立てなさい。それを心の慰みにするのだから、という歌意である。こうした火葬の煙に思いを寄せて詠う歌は、『後拾遺和歌集』以降の勅撰和歌集にしばしばみられる表現である。

④服喪の時は、『万葉集』には一切なく、一方で「三代集」すべてにみられる。

『後撰和歌集』巻第二十・哀傷（一三九一）

時望の朝臣身まかりてのち、果ての頃近くなりて、人のもとより、いかに思らむ、と言ひをこせたりければ　時望朝臣妻

別れにし 程を果てとも 思ほえず 恋しきことの 限なければ

これは、承平元年（九三八）三月に薨じた平時望の死を悲しむ妻の

和歌である。詞書にある「果ての頃」とは、妻の服喪が終わる頃を意味する。死に別れたことを最後とは思えません。喪明けは近くなってきましたが、あの人を恋しく思うことに限りはないので、という歌意になる。このように、平安貴族は服喪の間は死者をしのび、自身の悲しみを和歌にしていた。

⑥法要の時についてみると、例えばつぎのような和歌がある。

『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷（一二八八）

朱雀院の御四十九日の法事に、かの院の池の面に霧の立ちわたりて侍けるを見て　　権中納言敦忠

君なくて　立朝霧は　藤衣　池さへきるぞ　悲しかりける

これは、詞書によれば朱雀太上天皇の四十九日の法要において詠んだものである。朱雀太上天皇は、天暦六年（九五二）八月一五日に崩御したため、四十九日は一〇月二日にあたる。ただし、ここで作者として記されている藤原敦忠は、天慶六年（九四三）三月七日に薨じているため、敦忠が朱雀太上天皇の四十九日の法要に参加したとは考えられない。和歌は、朱雀太上天皇が崩御され、お住まいであった朱雀院にある池の面に朝霧が立ち込めている様子は、まるで池が喪服を着ているようにみえて悲しいことだ、という歌意になる。

こうした法要に関わる和歌は、「三代集」には八首あるのに対し、『万葉集』にはみられない。持統天皇が夫・天武天皇の崩御に対して詠んだ歌には「天皇の崩りましし後八年の九月九日、奉為の御斎会の夜に夢のうちに習ひ給へる御歌一首」（『万葉集』巻第二・一六二）という詞書が付けられており、天武天皇のための御斎会に関わる和歌であることがわかる。ただし、これも御斎会を行なった夜に夢の中で覚えた和歌であることが詞書によって説明されているように、法要そのものが詠歌の場であるとはいえないだろう。

よって、法要において死者への追悼の念を呼び起こし、その想いを和歌として表現するのは、平安貴族の知的教養を示すものであり、『万葉集』挽歌の歌々が死の瞬間もしくは死体に直面する場面で詠まれていることとは対照的である。

以上のような、『万葉集』と「三代集」との所収歌にみえる死者に対して悲しみを表現する時と場の違いは、喪の変遷に伴って生じたものと考えられるのではないだろうか。飛鳥時代の喪葬儀礼は、殯が長期間にわたって営まれ、死者に対して様々な儀礼が行なわれた。やがて奈良時代になると、殯の期間は短縮していく。[17] 遺体との関わりを持つ殯の期間が短縮することにより、遺体に奉仕する機会は必然的に失われることになった。挽歌が死そのものを詠むのに対し、哀傷歌が死体という物体から距離を置いて詠むのは、こうした喪の変遷によるものが大きいと考えられる。

また、平安時代には埋葬行為に対する意識にも特徴がみられる。

平安時代の葬送では、遺族などの参列者は火葬場で火葬を見届けるのみであり、火葬した遺骨は遺族とは別の数人が墓所へ行き埋葬する。[18]

『小右記』万寿四年（一〇二七）九月十七日条

十七日、甲寅。文任朝臣申云、去夜皇太后御葬送［大谷寺北、粟田口南］。禅閤歩行、右大臣已下相従、……暁更事了。辰時許権亮頼任持二御骨一向二木幡一、大僧都永円・御乳母子法師相添云々。……。

これは藤原妍子の葬送の記事である。一六日の夜、妍子の遺骸は大谷寺の北で粟田口の南へ運ばれるのだが、その行路には父・道長や教通らが随行した。明朝に火葬が終わり、午前八時ごろに妍子の遺骨は木幡の墓へ埋葬される。ただし、墓所へは藤原頼任のほか二名だけが向かったようである。

このように、火葬場へは父や兄弟などの肉親者も行くが、墓所での埋葬はわずか数名で行なわれている様子がうかがえる。殯の期間の短縮だけではなく、死者を埋葬する行為に奉仕する機会も減少しているのである。平安貴族が葬送の場面を詠むにあたって、火葬の煙を詠むようになっていくのは、当時の葬送が埋葬行為よりも、火葬に付す行為に重点が置かれていたためであると考えられるのではないだろうか。

三　死者と詠み人との関係の比較分析

つぎに『万葉集』挽歌と「三代集」哀傷歌とにおける所収歌の死者と詠み人との関係について考察していきたい。ただし、「三代集」には動物の死、出家の時、仏教観念の詠歌などのように、人の死を契機とするのではなく、現世の無常を詠む和歌が含まれている。本稿では、死者と詠み人との関係を明らかにしたいと考えているため、人の死を契機としない歌の営為については、今後の研究を待ちたい。

『万葉集』挽歌・「三代集」哀傷歌における死者と詠み人との関係を整理したものが表Cである。ただし、『万葉集』の場合は一人の詠み人が同じ死者に対して何首もの和歌を詠んでいるため、歌群をひとまとまりとすることとした。

表Cのように、『万葉集』では夫婦関係で詠まれるものがもっとも多く、[19]「三代集」では『万葉集』に一首もみられなかった、自分の親や子の死を悼む歌が最多である。[20]

さらに、自分の儚い身を嘆き、弔問の歌という現世の人間同士のやりとりで歌が完結している場合が哀傷歌にはみられる。弔問歌とは、たとえばつぎのような和歌である。

『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷（一三〇五・一三〇六）

大納言朝光が女の女御まかり隠れにけることを聞き侍て、筑紫よりとひにおこせて侍りける頃、子馬助親重が亡くなりて侍ければ　　藤原共政朝臣妻

我のみや　この世は憂きと　思へども　君も嘆くと　聞くぞ悲しき

返し

憂き世には　ある身も憂しと　嘆きつゝ　涙のみこそ　ふる心地すれ

藤原共政の妻が、藤原朝光の娘（花山天皇女御）の死を聞き、筑紫から弔問しようとしたとき、ちょうど自分の息子である親重が亡くなったため「自分だけが子供を亡くして世の中の無常を想っていたけれども、あなたも同じように嘆いていると聞くのは悲しいことです」という弔問の和歌を詠んだ。それに対して、子供を失ったつらい世の中に自分の身があるのを苦しいと嘆きながら、涙だけが雨となってこの世に降っている気持ちがすることだ、という返歌がなされている。このように、和歌のやり取りを通して、子供を失った親同士が悲しみを共有し合っているのである。

弔問に関わる歌は『古今和歌集』四首、『後撰和歌集』一七首、『拾遺和歌集』六首である。そのなかには右にあげたように、自身の悲嘆にくれるさまを詠んでいることが多い。死者をめぐる人間関係が、『万葉集』と「三代集」とでは違っていることが、数値として明確にあらわれている。

すなわち「三代集」哀傷歌の部立は、遺族との弔問の歌のやり取りが示すように、『万葉集』挽歌の部立にはみられない人間関係のなかで詠むという広がりを持っているとともに、死そのものを詠む『万葉集』挽歌とは異なり、教養としての挨拶程度のものであったといえる。[21]

『万葉集』挽歌・「三代集」哀傷歌にみえる死者と詠み人との関係に注目した和歌研究はこれまでにもなされている。菊地靖彦氏は、挽歌では最も多くみられた夫婦関係で詠まれる歌が『古今和歌集』哀傷歌ではまったくみられないことに関して、「夫や妻の死を悼む歌は、「晴」の歌としてふさわしいものではけっしてないとするのが撰者たちの意識であったろう」と指摘する。さらに、挽歌には一首もない親子関係で詠まれる歌が『古今和歌集』哀傷歌には四首もあることに関して、哀傷歌を成り立たせる意識が「むしろそうした歌をも「晴」の歌として定立しようとするもの」であり、「夫や妻の死を悼む歌は斥けたというあたりには、古今撰者たちの峻切な新風樹立意識をみないわけにはいかない」と評価し、『古今和歌集』における公的性格を指摘している。[22]

さらに、菊地氏の指摘を継承しつつも、『古今和歌集』だけではなく「八代集」所収の哀傷歌に考察範囲を広げて死者と詠み人との関係を分類して、哀傷歌の諸相を解明したものに沢田恵理子氏の研

究がある。そのなかで沢田氏は、夫婦関係で詠まれた哀傷歌が『古今和歌集』では皆無であり、『後撰和歌集』では一一首もとられていることに関して、『万葉集』では多くとられていることを指摘した上で「後撰集の撰者たちは、それを古今集が敢えて削除したことに無理を感じた為」とし、『古今和歌集』から『後撰和歌集』への哀傷歌の流れを説明している。[23]

このように従来、『万葉集』・「三代集」における死者と詠み人との関係は、『古今和歌集』や「八代集」の性格を考えるなかで論じられてきた。[24] しかし、ここにみられる人間関係の違いは、それぞれの編纂事情によるだけではなく、当時の服喪のあり方にも要因があるのではないだろうか。律令には服喪について、つぎのように規定されている。

『養老令』喪葬令・服紀条

凡服紀者、為二君・父母及夫・本主一一年。祖父母・養父母、五月。曾祖父母・外祖父母・伯叔姑・妻・兄弟姉妹・夫之父母・嫡子、三月。高祖父母・舅姨・継母・継父同居・異父兄弟姉妹・衆子・嫡孫、一月。衆孫・従父兄弟姉妹・兄弟子、七日。

両親や夫の死ならば一年間の服喪、祖父母ならば五ヶ月間といったように服喪が義務付けられ、死者との血縁関係によってそれぞれ喪の期間が設定された。すなわち、埋葬と同時に服喪者全員の喪が明ける飛鳥時代とは異なり、死者と服喪者との個々の関係に伴って喪が早く明ける者もあれば、最長一年間の喪に服す者もいるのである。そして、律令の服紀規定によって生じた親の死がもっとも重い喪の一つであるという社会認識が、「三代集」哀傷歌において親子間の死別を詠む契機となったのではないだろうか。

以上の検討を通じて明確にいえることは、挽歌と哀傷歌とは異なるものであるということである。このこと自体は、文学研究においてもある程度、認識されていたことであろうが、両者の相違は喪の違いよるものであることを強調しておきたい。

おわりに

本稿では、死を悼む和歌の本意を明らかにするとともに、喪の変化が死を悼む和歌に及ぼした影響について追究してきた。ここに改めて整理しておく。

死を悼む和歌の大半は、挽歌・哀傷歌といった部立に所収されている。しかし、部立や和歌集への所収は編纂者の意図によって行なわれるものであり、詠み人が和歌を創作する当初から挽歌や哀傷歌の部立を念頭に置いていたとは到底考えられまい。そのためときとして、一方の和歌集では死を悼むものとして所収されており、同じ

歌がもう一方の和歌集では死とは関わりのない形で所収されるという事態が起こる。これは死を悼む和歌の内実を探るうえで無視できない問題である。そこで、死を悼む和歌について、勅撰和歌集だけではなく私家集にまで調査の範囲を広げて、和歌集への所収状況を調べた。その結果、死を悼む和歌は詠歌状況を説明する詞書が重要な役割をしていることがわかった。よって詞書は、死を悼む行為とはこうあるべきだという、死を悼む和歌の本意をもっともよく示していると考えられる。

そこで、『万葉集』挽歌と「三代集」哀傷歌との詞書の分析から、死を悼む和歌の詠歌される場面について検討した。結果は、『万葉集』は死・葬送といった生々しい場面での詠歌に主眼が置かれており、死そのものを詠むという特徴がある。一方で「三代集」は、服喪や法要といった直接的な死から離れた場面が詠まれるといったように、それぞれ詠歌場面を異にしていたことが判明した。こうした場面の違いは、喪の差異によるものと考えられる。というのも、飛鳥時代は殯が長期にわたって営まれ、死者に対してさまざまな儀礼を行なっていた。それがやがて、殯の期間が短縮することで遺体に奉仕する機会は必然的に失われる。『万葉集』所収歌が死そのものを詠むのに対して、「三代集」所収歌が遺体とは距離を置いて詠まれるのは、こうした喪の変遷に由来するものと位置付けた。

つぎに、死者と詠み人との関係についても比較検討を行なった。結果、『万葉集』では夫婦関係で詠まれる歌が最多で、「三代集」は『万葉集』にはみられない親子関係での詠歌がもっとも多かった。さらに「三代集」では、遺族を弔問する歌が登場することから、詠み人と死者との関係に距離が生じる傾向にあることを明らかにした。こうした人間関係の違いは、服喪のあり方に起因するものと考えられる。

このように、『万葉集』挽歌と「三代集」哀傷歌とを比較検討した結果、それぞれ詠歌場面という視点からも、人間関係という視点からも異なるものであるということがわかった。ただし、和歌変遷の具体相は過渡期にあたる和歌そのものの内実に宿っている。よって、全体像ばかりではなく、個々の和歌を丹念に読み解いていく必要もあろうが、これは次稿に譲りたい。

［注］

（1）西郷信綱「柿本人麿」（『増補　詩の発生』未来社、一九六四年。初出は一九五八年）。

（2）和田萃「殯の基礎的考察」（『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上、塙書房、一九九五年。初出は一九六九年）。

（3）土橋寛「喪歌と挽歌」（『古代歌謡の世界』第二章、塙書房、一九八四年）。

（4）塚本澄子「「女の挽歌」存疑―天智天皇挽歌群をめぐって」（『万葉挽歌

の成立』笠間書院、二〇一一年。初出は一九八八年）。

（5）神野志隆光「「大御葬歌」の場と成立 殯宮儀礼説批判」（『五味智英先生古稀記念 上代文學論叢・論集上代文学 第八冊』笠間書院、一九七七年）。藤原享和「「大御葬歌」の場」（『古代宮廷儀礼と歌謡』おうふう、二〇〇七年。初出は一九九五年）。

（6）身崎壽『宮廷挽歌の世界―古代王権と万葉和歌―』塙選書、一九九四年。伊藤博「挽歌の創成」（『万葉集の歌人と作品 上』塙書房、一〇七五年。初出は一九七〇年）。阿蘇瑞枝「挽歌の歴史」（『論集上代文学 第一冊』笠間書院、一九七〇年）など。

（7）上野誠「日並皇子挽歌と〈誄詞〉の受容」（『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』雄山閣、一九九七年。初出は一九九〇年）。

（8）松田武夫「哀傷歌の構造」（『古今集の構造に関する研究』再版、風間書房、一九八〇年）。

（9）田中直「勅撰集と〈死〉の主題―『古今集』『拾遺集』の哀傷歌配列から―」（『和歌文学研究』五十、一九八五年）。

（10）菊地靖彦『『古今集』の構成―そのⅡ・哀傷と俳諧」（『古今的世界の研究』笠間書院、一九八〇年）。

（11）木村正中「解説」（『土佐日記　貫之集』新潮日本古典集成、一九八八年）三三九頁。

（12）前掲菊地氏論文、一九五・一九六頁。

（13）前注論文、二〇二頁。

（14）梶川信行「挽歌の位相」（『万葉史の論　笠金村』桜楓社、一九八七年。初出は一九八二年）は、『万葉集』の挽歌に所収される歌について「作者自身のジャンル意識によるのではなく、万葉編者の分類意識によって「挽歌」となった」（三六頁）、「ジャンル意識とは、ほとんど無縁なところで制作された歌々を、編者の恣意的なジャンル意識の枠の中に入れてしまったものの総体が、『万葉集』の「挽歌」であろう」（三七頁）と指摘する。『万葉集』の題詞や左注にみえる詠歌場面には、編者の意図する部分もあることを念頭に置きたい。

（15）島田良二「八代集における月について」（『古今集とその周辺』笠間書院、一九八七年。初出は一九八二年）。

（16）前掲松田氏論文。

（17）前掲和田氏論文。

（18）朧谷寿「平安時代の公卿層の葬墓―九・一〇世紀を中心として―」（笠谷和比古編『公家と武家』Ⅱ、思文閣出版、一九九九年）。栗原弘「藤原道長家族の葬送について」（『名古屋文理大学紀要』五、二〇〇五年）などを参照。

（19）青木生子氏がすでに指摘するように、『万葉集』挽歌の表現には相聞歌の表現と重なる部分が多い（『万葉挽歌論』塙書房、一九八四年）。挽歌所収歌に男女間の歌が多いことと通底する問題のように思う。

（20）『万葉集』巻十六・三八六〇番歌～三八六九番歌の左注には、「或は云はく「筑前国守山上憶良臣、妻子の傷を悲感しび、志を述べてこの歌を作れり」といふ」とある。夫・親の死を嘆く歌群であるが、挽歌の部立に所収されていないこと、子の気持ちを山上憶良が代作した歌であることから本稿では扱わないこととした。

（21）弔問歌は『万葉集』挽歌の部立所収歌にはみられないが、巻十九には

「大伴宿祢家持、聟南右大臣家の藤原二郎が慈母を喪へる患を弔へり」という左注のある歌（四二一四～四二一六）がある。こうした『万葉集』にみえる弔問歌の萌芽については別稿を期したい。

(22) 菊地靖彦「古今集の「哀傷歌」をめぐって」（『平安文学研究』四八、一九七二年）三九頁。

(23) 沢田恵理子「八代集哀傷歌の一考察」（『女子大国文』七一、一九七三年）、二五頁。

(24) 沖奈保子「『拾遺和歌集』の亡き子哀傷歌―藤原氏の子女の死を中心に―」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』一二、二〇〇五年）は、『拾遺集』において子の死を詠む哀傷歌が多くとられている要因として、当時の社会的・政治的背景を指摘する。

表A「三代集」における「題しらず」の用例

		『古今和歌集』	『後撰和歌集』	『拾遺和歌集』
哀傷歌の部立	該当歌	2首 (5%)	1首 (2%)	8首 (10%)
	総歌数	34首	40首	78首
四季の部立	該当歌	122首 (35%)	222首 (43%)	103首 (39%)
	総歌数	342首	506首	262首
恋歌の部立	該当歌	295首 (81%)	83首 (14%)	270首 (71%)
	総歌数	360首	568首	379首

［凡例］本表は、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』における哀傷歌・四季歌・恋歌の部立にそれぞれ所収されている和歌の詞書が「題しらず」である和歌の歌数を集計したものである。各和歌集の各部立における「題しらず」の割合は、(%) によって示した。

表B　『万葉集』挽歌・「三代集」哀傷歌の詠歌場面

	総歌数	①	②	③	④	⑤	⑥	他
『万葉集』挽歌	219	4 (2%)	29 (13%)	72 (32%)	0	55 (25%)	0	59 (26%)
『古今和歌集』巻十六	34	6 (17%)	6 (17%)	3 (8%)	9 (26%)	9 (26%)	1 (2%)	0
『後撰和歌集』巻二十	40	0	5 (12%)	0	14 (35%)	20 (50%)	1 (2%)	0
『拾遺和歌集』巻二十	78	4 (5%)	5 (6%)	0	18 (23%)	7 (8%)	5 (6%)	39 (50%)

［凡例］本表は、『万葉集』挽歌の部立に所収されている和歌および「三代集」哀傷歌の部立に所収されている和歌を、喪葬儀礼の進行に留意しながら、6つの場面に区分して、その歌数を示したものである。区分は、①辞世の歌、②詠み人が死を知った時、③喪葬の場面、④服喪の時、⑤追懐する場面、⑥法要の時、その他、である。

表C　『万葉集』挽歌・「三代集」哀傷歌の人間関係

	親子関係	夫婦関係	主従関係	兄弟関係
『万葉集』挽歌	0歌群	34歌群	13歌群	5歌群
『古今和歌集』巻十六	2首	0首	3首	2首
『後撰和歌集』巻二十	3首	11首	3首	5首
『拾遺和歌集』巻二十	11首	9首	2首	1首

［凡例］　本表は、『万葉集』挽歌の部立に所収されている歌群および「三代集」哀傷歌の部立に所収されている和歌について、死者と詠み人との関係を示したものである。当然であるが、「よみびと知らず」のように死者と詠み人との関係性が明らかでないものや、辞世の歌のような独詠歌などは含まれない。